



第13回 安城学園報告討論会

■ 安城学園報告討論会

日 時：平成23年6月18日(土) 9:00～13:05
場 所：愛知学泉大学・愛知学泉短期大学 岡崎学舎
テ ー マ：「教育にイノベーションを！」～高大・高短教育連携～
特別講演：「学校教育とPISA型学力 ーどのように育成し評価するかー」
【講師】成田 秀夫 氏（河合塾教育研究開発本部 開発研究職・講師）
「PISA型読解力について考える」（第10分科会）
【講師】茅野 俊正 氏（愛知県総合教育センター 研究指導主事）

■ 安城学園報告討論会 幼稚園の部

日 時：平成23年8月27日(土) 9:00～12:00
場 所：安城市昭林公民館
テ ー マ：「教育にイノベーションを！」ー社会から評価される幼児教育を目指してー
特別講演：「歴史に学んで指導計画を考える」
【講師】清原みさ子 氏（愛知県立大学教育福祉学部教育発達学科 教授）

今回の報告討論会のサブテーマは「高大・高短教育連携」ですので、対象は高等学校の先生、大学・短大の先生、そして事務職員です。従って、幼稚園の先生は別の日に開催します。

～～～～～～～～

最初に、「現代社会について」ということです。日本の社会は現在いろいろな問題を抱えていることは、皆さんもよくご存知のことです。適当に挙げてみると、国については現在約100兆の赤字であり、これがどんどん増えていくと言われております。簡単に言うと、税金に対して支出が多いということがあります。これを放っておくわけにはいけないわけですが、これは政治家だけの問題ではなく国民一人ひとりが考えていく問題だと思います。

一方、少子高齢化という問題もあります。現在65歳以上の方が大体21%、そして25年後は40%になると言われております。また、今から100年後の日本の人口は約4,000万台になるとも言われており、僕らが今までに経験したことのない時代に入るわけです。今後の社会は人口減少社会なのだということを踏まえた上で、どんな風に生きていくのかということについて考える必要があります。

さらに、原発の問題もあります。私たちは電気に依存した生活をしていますが、これからは僕らの生活のあり方、つまりライフスタイルを変えていく必要もあると思います。

それから、最近では日本の薄型テレビが世界シェアにおいて韓国に負けています。経済のグローバル化の影響で、国際競争力がますます求められる時代です。資源競争も激しくなっています。そういう中で、日本の子どもの人口は減っていく、従って、生産年齢人口も減っていくということ。だから、これからの日本は付加価値を生み出すことができる人材を育成することが私たちの共通の課題であると考えます。

また、政治の世界では今ポピュリズム的な流れがあります。「マーケット」という言葉は、従来は経済用語でした。ところが、現代社会では、特に日本やアメリカではマーケット型の民主主義に移行しつつあるのではないかと理解しています。

このような中で課題を2つ挙げると、一つは新しい形のライフスタイルを創造しなければならないこ

と、二つ目は新しい形の地域社会を創造しなければならないことです。特に、今回の大震災を体験して、私たちの住んでいる三河も新しい形の地域社会を創造する必要があり、それが課題だと思っております。本学の場合、岡崎学舎がライフスタイルのデザインを、豊田学舎が地域社会のデザインをそれぞれにモチーフにした教育活動をしています。



～～～～～～～～

安城学園は今年で100年目です。皆さんもたまには「おもいでぐさ」を読んでいただいていると思いますが、これが安城学園の原点です。ちょうど今から100年前の明治45年に安城裁縫女学校を創立しました。その時、寺部だい先生は前理事長先生を背中に背負って設立の認可状をいただいたそうです。

ここで、今回の報告討論会のタイトルでもある「教育にイノベーションを」というのは、2つの意味があります。一つは一般的な意味で、教育の世界でもイノベーションが必要だということ。二つ目は101年目から学校法人安城学園の教育が新しく変わるために、イノベーションが必要だということです。

学校法人安城学園の場合、この5年間を見ると、投入しているエネルギーに対してアウトプットとしての出力が少ない。言い換えると、支出の方が多くて収入がそれより少なく、国と全く同じ状態であります。この現状を乗り越えるという意味でもイノベーションは必要であり、しかも教育にイノベーションが必要です。

努力をしているにも関わらずなかなか成果として現れないのは何故でしょうか。その理由の一つは、努力のベクトルが合っていないからだと思います。一人ひとり最大限の努力をしても、ベクトルが合わなかったら全体の力にはなりません。昔物理で習ったように、力の向きが仕事の向きに対して垂直

だと、どれだけエネルギーを与えても仕事量はゼロだということです。

さて、101年目から新しい教育が始まります。準備を平成18年からやっています。今日のポイントの一つは、安城学園の教育の原点の再確認です。ぐらぐら揺れるのではなくて、「あれがいい」「これがいい」「それがいい」と目移りするのではなくて、教育に対する方針を教職員の皆さんが常にしっかりと押さえておく必要があります。

「建学の精神に基づいた教育を強力に推進する」。これは豊田学舎の学長室に掲げてあるものです。このことによって栄えるのが私立学校です。建学の精神に基づかずに栄えるのは結構ですが、それでは私立学校ではないということです。それからもう一つ、「百年の河清を待つが如し」。これは理事長室に掲げてあり、前理事長先生がお書きになったのですが、建学の精神に基づいた教育を実現するには、100年ぐらいの時間がかかるという意味合いです。

～～・～～・～～・～～

資料(図1)の初めにある言葉は、85周年の時に安城学園全体の建学の理念としてまとめた意味深い言葉です。「宇宙の中の一つの生命体である人が、だから私たちは動物や生物と同じ生命体なのです。そして、その人が「人間として自立しつつありとあらゆる生命体と共生することによって、生きる意志と生きる力と生きる喜びに満ち溢れた鵬のような大局的な存在」になる、こういう教育がしたいということです。

宇宙の中の一つの生命体である人が、人間として自立しつつありとあらゆる生命体と共生することによって、生きる意志と生きる力と生きる喜びに満ち溢れた鵬のような大局的な存在となること。

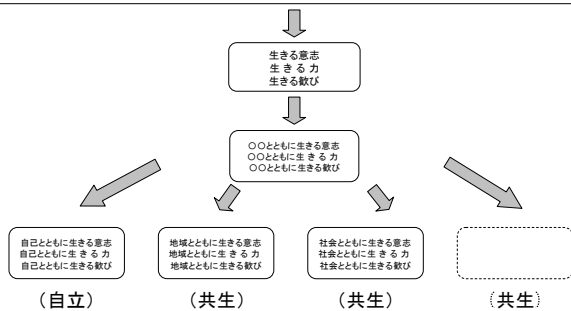


図1 共通の教育目標について

ポイントをピックアップすると、「生きる意志に満ち溢れ」、現在の若者を見てみるとこれは現代社会で非常に大事なことです。しかし「生きる意志」だけでは生きていけないので、「生きる力に満ち溢れ」、その結果生きていて良かったという「生きる喜びに満ち溢れた」存在になってほしいということです。

そして、これをどのようにして確認するかと言う

と、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神が実践できるかどうかです。四大精神が実践できれば、学生・生徒・園児であろうと、先生方であろうと、「生きる喜びに満ち溢れた」存在になれるということです。

しかし、これだけでは教育の場面に展開させにくいので、英語のように原形に対して派生形を考えます。原形は「生きる意志」「生きる力」「生きる喜び」です。まずは頭に「とともに」を付けて、「〇〇とともに生きる」とします。そして次はこの「〇〇」の所にいろいろな言葉を当てはめます。最初に当てはめるのは「自己」です。「自己とともに生きる意志」「自己とともに生きる力」「自己とともに生きる喜び」。簡単に言うと「自立」ということです。

安城学園の教育の原点の一つは、職業学校です。女性が職業を持って経済的に「自立」できる力を身に付けることです。それから他の教育の原点の一つは、「誰でも無限の可能性を持っている」という信念です。「誰でも無限の可能性を持っている」と思える人が本学の教職員です。子どもたちは「誰でも無限の可能性を持っている」のだから、「一人ひとりの潜在能力を可能性の限界まで開発する」ことが学校法人安城学園の教育の定義です。

この100年間、苦しい時もありましたし、潰れそうになった時もありました。しかし、その中で生きてこられたのは、私たちの先輩教職員が目の前の子どもたちに「誰でも無限の可能性を持っている」という信念を持って、彼らの潜在能力を開発してきたからです。今までも教育にイノベーションはあったから、いまの現在があるわけです。

話は戻りまして、先ほどの「〇〇」に「地域」や「社会」を入れて「地域とともに生きる」「社会とともに生きる」にします。また、環境問題を考える時は「地球」を入れて、「地球とともに生きる」とします。このようにすると教育の課題が浮かび上がってきます。正月の時に皆さんにお配りしたものに、「現代社会の中で人々が直面する現実の諸問題を適切に、かつ実践的に解決していくことができる能力を持った、こういう人間の育成することが、学校法人安城学園の幼稚園から大学までの教育の課題であります」と書きました。

教育というのは先生方一人ひとりの創意工夫が必要です。この建学の理念に対する考え方をしっかりと押さえた上で、先生方自身の専門性を発揮して、自身

の力を活かして、様々な課題に取り組み、豊かな教育を実現してください。

~~~~~

次は「『知・徳・体』から『知・徳・体・行』へ」です(図2)。これは今日のポイントの一つで、PISA型学力にも関連します。私たちはまだ従来の学校教育の残滓に今でも吹っ切れていないように思います。だから目の前の学生さんを見た時に、何で出来ないのだろうと思ってしまいますが、そうではないのです。誰でも無限の可能性を持っております。

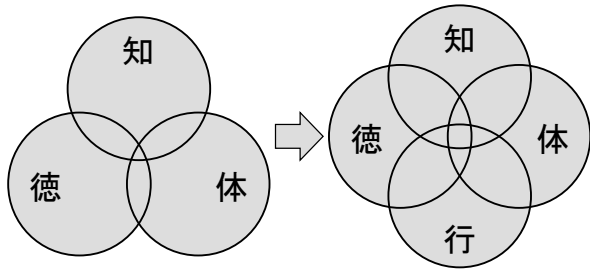


図2 教育の枠組みについて(1)

「学ぶ意欲を喚起する教育」「学ぶ喜びを経験する教育」は、現在小学校から大学まで取り組んでいる課題です。しかし、「知・徳・体」という従来の枠組みだけではやはり無理があると思います。それに対して、「知・徳・体・行」を提案しています。この「行」とは行動特性のことです。だから、本学は平成18年度から、特に大学・短大で行動特性の基礎である社会人基礎力に力を入れてきました。もっとも、従来からの「知・徳・体」を否定しているわけではありません。

これからの社会は変化が激しく、また、その変化も急に来る場合があります。例えば、今回の地震もそうですし、10年前の9.11もそうです。従って、変化に適応する力が必要です。しかし、変化に適応するだけだと疲れるばかりなので、やはり変化を創造する力も必要です。そのためには教育のイノベーションがある。しかし、イノベーションといっても教育の基本的な枠組みの中で興すものであって、このことをしっかりと共通認識にしておくことが大事だと思います。

次の資料(図3)は何かと言うと、今の話は別に高等学校のことだけではありません。小学校教育も、中学校教育も、高校教育も、大学教育も、それから社会人になってからも必要な枠組みです。自己を成長させる、潜在能力を開発する枠組みは、基本的に「知・徳・体・行」というこの四つです。

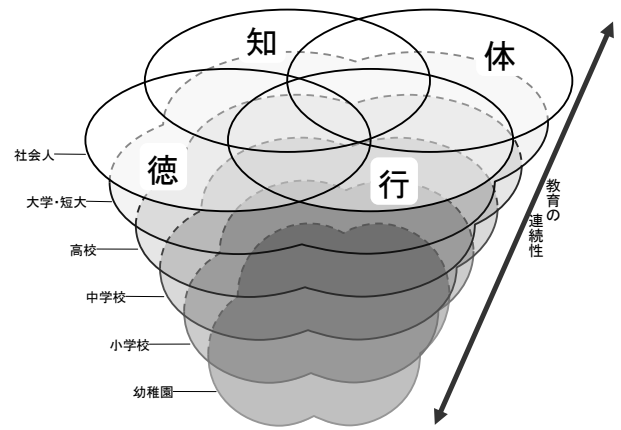


図3 教育の枠組みについて(2)

中学校から高校に変わったから、高校から大学に変わったからといって教育の枠組みは変わりません。一人の子どもを見た時に、幼稚園に入って園児になり、小学生になって、中学生になって、高校になって、大学を出て、社会に出ても、教育の枠組みには連続性があります。

「学校知」という言葉があります。これは学校の中で「おまえ凄いな」と評価されることです。しかし、社会に出た時にそれが役に立つかどうかは分かりません。いい企業に入るには役に立つかもしれませんが、学校の中だけで評価される人間では、これからは生きていけないと思います。だから学校で学んだことが、社会に出た時に本当に役に立つことが、特にいま一番求められています。これもまた教育のイノベーションの焦点の一つかなと思います。

~~~~~

次の資料(図4)を見てください。「知・徳・体・行」という枠組みのそれぞれを「分野横断」と「特定分野」という2つ軸で分類しました。「知」の場合、「特定分野」というのは高校の場合、国語・社会・数学・理科・英語といった従来の教科型学力のことです。教科型学力も大事ですが、もう一つの「分野横断」に当たる教科横断型学力が今社会から必要とされているのであります。

「知」		分野横断	特定分野
応用	1	2	
基礎	3	4	

「体」		分野横断	特定分野
応用	1	2	
基礎	3	4	

「徳」		分野横断	特定分野
応用	1	2	
基礎	3	4	

「行」		分野横断	特定分野
応用	1	2	
基礎	3	4	

図4 教育のイノベーションは?から

さて、資料の見出しに「教育のイノベーションは？から」と書きました。「知・徳・体・行」の枠組みのそれぞれを今度は「基礎」と「応用」という軸で分類しています。「知」を育てる場合にも「基礎」があつて「応用」があります。「行」動特性を育てる場合も「体」を育てる場合も同様であります。

例えば、「体」を育てる場合、「特定分野」の「応用」というのはプロのスポーツ選手などが行うレベルの訓練がこの領域に当たり、学校教育ではちょっと手が出ない領域です。大学における専門科目は、「知」の所の「特定分野」の「応用」に当たります。高等学校の教科型学力は、「知」の「特定分野」の「基礎」に当たります。高校では4番の領域を主に教えているわけです。

「分野横断」というのは、例えば将来政治の世界で活躍しようが、経済の世界で活躍しようが、生涯どの職業に就こうとも、あるいはどんな人生を生きようとも必要な力のことです。一方、「特定分野」の方は、医者に必要な専門性、学校の先生に必要な専門性など各自の職業にとって必要な力のことです。

従って、教育のイノベーションと言っても何も派手なことをするわけではありません。「分野横断」の「基礎」という3番の領域、将来どの職業に就こうとも、どんな人生を送ろうとも必要な力の分野に注目しているのです。「体」の場合、野球選手になるためということではなく、学生時代も、社会人になっても将来にどんな人生を送ろうとも必要な体の基礎を育てることです。

「行」の方では、社会人基礎力になります。管理栄養士になるためにはそのコンピテンシーを身につける必要があります、小学校の先生になるためにはそのための行動特性が必要です。社会人基礎力は、それらの基礎となる行動特性で、将来どの職業に就こうとも、どんな人生を送ろうとも必要な力です。教育の課題は、個々の教科・科目を身に付けるのが目的ではなく、それを活用して自分の問題、家族の問題、地域社会の問題、あるいは日本の問題などを解決する問題解決能力を身に付けることです。そのための教育の枠組みを考える必要があるということです。

~~~~~

今日はこのような意味で、次の講演でPISA型教育の話を知りたいということ。PISA型教育は大学には関係のない話ではありません。もともとPISA型教育というのは義務教育を終えた段階の教科型学力で

はなく、これからの社会で活躍するために必要な獲得した知識・技術を活用できる力に焦点を当てたものです。

今、大学教育でもこの導入が検討されています。

「PISA型教育について」が今回の焦点ですが、PISA型教育を意

識しなくても教科型教育を教科横断型教育にすることはでき、それは必要なことです。教科型教育では、国語、社会、数学、理科、英語はそれぞれ並列に並んでいます。教える先生もそれぞれを専門に教えます。しかし、これを1階と2階に分けます。(図5)

1階には国語と数学と英語が並んでいます。これは全て言葉とか言語に関わる科目です。英語は国際交流をする時だけに必要なもの、数学は理系に進む人だけに必要なもの、従って、私には関係ないという理解ではいけません。これらは教育において土台となるものです。言葉としての国語、あるいはコミュニケーションツールとしての国語。英語も言葉として、コミュニケーションツールとしての英語。数学も実は言葉であり、言葉としての、コミュニケーションのツールとしての数学があります。そして、その上にコンテンツが乗っています。

では、国語の先生は文学を教えているけれど、それはどうなるのかということです。資料の一番下の図には国語、数学、英語は2階にもあり、点線で囲まれています。これらは言葉としての国語、数学、英語を使って作られた作品、コンテンツという意味です。国語の文学もここに含まれます。言語としての側面と、それからその言語を使って作られた作品を区別することが大事です。

つまり、国語と数学、あるいは国語と英語というように教科を横断して教育をすれば、教科横断型教育になります。

生徒が「今日は社会科の授業なのに、何か国語の授業みたいだったな。でも、良く考えてみたら社会科の

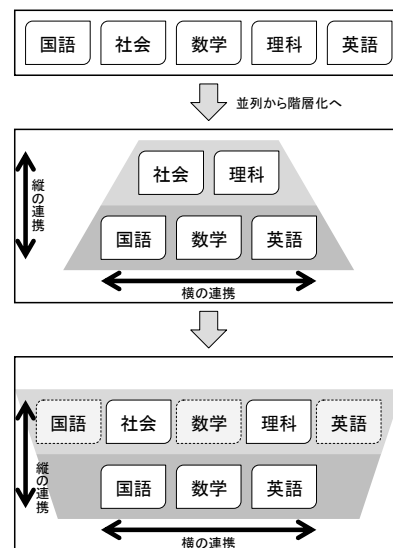


図5

「教科型教育」から「教科横断型教育」へ

授業だった」と。「今日は英語の授業なのに、国語の授業みたいだった。しかし、よく振り返って見ると英語の授業だった」というような授業展開です。

大学の専門科目では、より高度に言葉としての国語や、言葉としての数学を教育することになります。脱線しますが、高校の時に自分は計算が好きだからといって理学部の数学科に行くと落ちこぼれます。工学部に進んだら大丈夫ですが。大体理学部の数学科では、「ゼロとは何か」というようなことを勉強します。そういう意味で言葉の探求なのです。数学というのは実は言葉なのだということが分かれば、ぐーんと伸びます。数学だけでなく国語もそうです。

従って、文系・理系という枠組みをベースにしている限り、教育の未来はないと感じます。極端に言えば、大学を選ぶ時に、数学が嫌いだから文系に行こうとか、英語ができないから理系に行こうとかという選択ではダメだと思います。これでは教育にイノベーションは興らないのです。

～～～～～～～～

次の話はいわゆる教育連携です。長い歴史で見ると女子短期大学・女子大学の頃は安城学園高等学校は女子校でしたので、教育連携などあまり難しいことを言わなくても、自然と連携する意志が生まれ、実際に連携していたと思います。

ところが、各設置校とも男女共学になりました。昔は大学に入ることが難しかったのですが、今は入学する選択肢がいっぱいあります。そこで高大連携が叫ばれるようになりました。その時に、前から言っているのは、大事なのはまず教育連携だということです。「最初に募集連携ありき」ではありません。募集の数の話は、保護者にも子どもにも関係のない話です。誰のために連携するかということです。今の国の政治を見た時に、本当に国民のために政治をしていると思いますか。本当に学生さん、保護者のことを念頭においていたら、必然的に教育連携することになります。

先ほど言った様に、昔は高校と大学にはバリアがあり、大学には入りにくかった。しかし、今は逆にシームレスになってきたので、高校教育と大学教育を連携して、高校教育と短大教育を連携して、いい教育を作らないといけないし、作ることでできる環境があると思います。

そうは言っても、両高校から豊田学舎には大体 40

名、短期大学には 90～100 名、家政学部には 30 名という数値目標を出しています。ただし、数値目標を出したからといって、うまくいくとは限りません。つまり、この目標を達成するためには、大学・短大に送って良かったと高校の先生方が感じる必要があります。すると、保護者にも生徒にも勧められます。

例えば、城西高校で 3 年間過ごして他の大学で 4 年間過ごすよりも、同じ系列大学の家政学部で 4 年間過ごし、合わせた 7 年間の方が価値があるということ、大学の先生と高校の先生とが協力して作り上げる。そうすると、作り上げることで自体に価値が出てくるし、また、募集の安定にもつながっていきます。

逆に言うと、例えば豊田学舎の場合、定員は 240 名ですから、目標の 40 名をさらに 50 名、60 名にして欲しいと欲を出してはいけません。引き算した 200 名を系列校以外から集めるという戦略を立てる創意工夫が必要だということです。単に数値目標を出しているわけではなくて、保護者のこと、それからやはり学生のことを考えてください。付加価値をどう上げるか、ここに焦点を当ててください。



～～～～～～～～

最後になりますが、言いたいことは「学生、生徒、園児一人ひとりの潜在能力を可能性の限界まで開発する」ということです。そして、私たちも同じ課題を抱えています。学校という場は本当にありがたく、学生の成長とともに教職員も成長できる場があります。教職員一人ひとりが、仕事を通して自己の潜在能力を可能性の限界まで開発することに是非挑戦していただきたいと思います。

来年度から新しい教育を始めたいと思っています。今日の分科会がいいきっかけになることを願いまして、終わらせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。